

スズメ目 モズ科

アカモズ

Lanius cristatus superciliosus Latham, 1801

英名: [Brown shrike]

カテゴリー判定基準: A-2

旧レッドリストカテゴリー		
1991	1998	2007
—	NT	EN

亜種アカモズは1990年代には大きく個体数を減じていた。北海道では1973~74年から1990年の個体数は80%以上減少した。石狩地方では、1993年と1997年間に67%減少した。長野県野辺山一部地域には50~60つがいが恒常に繁殖していたが、1998年に20羽となり、2005年には繁殖つがいがなくなった。野辺山における1998年にかけた減少は越冬域の大規模な森林火災の影響であると推察されたが、その後の減少要因は明らかではない。

Race *superciliosus* has drastically declined. Race *superciliosus* populations in Hokkaido declined by approximately 80% over the approximately 20-year period between 1973-4 and 1990. They had also decreased by 67% over the four years between 1993 and 1997 in Ishikari, Hokkaido. In the Nobeyama plateau, central Honshu, the population size remained between 50 and 60 pairs, but it declined to 20 individuals in 1998, and no pair bred there in 2005. Although it was inferred that the decline was caused by habitat loss in the breeding ground in Japan, deterioration of wintering habitats would also affect the decline.

基礎情報

■形態 全長17~20cm、体重オス 27~34g、メス28~37g。頭から背、尾羽まで上面は橙色であり、喉から腹まで白い。嘴と脚は黒色。雌雄ともに黒色で眼の幅よりも少し太い過眼線がある。性的二型は顕著ではないが、オスはメスよりも上面の橙色が強く、過眼線は明瞭である。メスは脇腹に波状斑を持つものがある。額の白色帯はオスで幅が広い。モズ、チゴモズのオスに見られるような初列風切基部の白斑は明瞭ではない。モズのオスとの識別は容易で、モズのオスの上面は主に灰色で翼に明瞭な白斑がある。モズのメスの上面は茶褐色でアカモズに類似するものの、くすんだ色彩で区別ができる。またアカモズは、ゲイゲイゲイと聞こえる声を頻繁に発するが、モズはこのような声を発しない。

■分布域 国内の繁殖地においては夏鳥である。直近の自然環境基礎調査では可能性を含めても繁殖メッシュは3つにすぎない。しかし、

石狩川流域の農耕地や石狩湾岸のカシワからなる防風砂防林では少數が確認されている。これまで本州日本海側の防風砂防林では繁殖が確認されてきており、詳細な調査を実施すれば少數ながら分布域は拡大されると思われる。なお、足輪で標識された個体が越冬域と考えられている東南アジアにおいて再捕獲された例はなく、渡りルートはほとんど判っていない。

■生息環境 アカモズは北海道では高標高地には生息しないが、本州中部では標高1,400mくらいまで生息する。自然の草地や農耕牧草地を好み灌木に営巣する。海岸沿いの防風砂防林にも生息するがその場合、樹高は5m程が適しているようである。巣の地上からの高さは平均160cmで範囲は50~620cmと広い。縄張りの面積は、抱卵期は0.5haほどで、育雛期 1.83~2.12haと広くなる。

■生活史 5月の中下旬に日本に渡来し繁殖する。一夫一妻。一腹卵数は4~5卵。約14日間の抱卵、約14日間の育雛期を経て、巣立ちする。

様々な昆虫類、カエルなどを食べる。カッコウの托卵を受けることがある。一年だけの結果であるが、本亜種は比較的帰還率が高い。北海道石狩地方で1992年と1993年に繁殖したオス14羽のうち6羽がほぼ同じ場所で繁殖した。帰還率は43%である。メスはオスに比して低く、8羽中1羽で帰還率は13%である。同じ場所の同じ期間におけるモズのオスの帰還率は18%、メスは帰還しなかった。

現在の生息状況

■分布域の現況 これまで減少を続けたため確認調査の精度が落ちている可能性がある。本種に特化した確認調査を実施しなければ分布域の現況の把握は困難である。

■生息地の現況 亜種アカモズは1990年代には大きく個体数を減じていた。北海道における1973~74年と1990年の調査で、全く確認されなくなった地域があり、札幌郊外では個体数が87%減少した地域があった。札幌周辺とオホーツク沿岸域では、約80%減少した。石狩地方で行われた詳細な調査では1993年と1997年間に67%減少した。長野県野辺山高原では、50~60つがいが恒常に繁殖していたが1998年に20羽となり、その後10羽以下のレベルで維持されていたが、2005年には繁殖が確認されなくなった。

■個体数の現況 生息総個体数を推定できる資料はなく不明である。

存続を脅かす要因

繁殖に適した場所が開発により減少したことが最大の要因と推察されるが、越冬域における生息環境の収奪も要因になっている可能性がある(13、14、15-1、15-2、16、54、71)。

保護対策の現状

とくになし。

特記事項

渡り性のモズ類は土地執着性が高く、局的に生息確認できなくなるとその場所に繁殖個体を復活させることは困難と思われる。現在繁殖が確認できている地域での繁殖成功を高め、分散個体を増加させることで個体数を増加させ、分布域を拡大させることができ最も効果的な方法と考える。

大河川の河川敷は不定期な大水で搅乱を受け、草地と低木が混在した環境になる。河川改修でこのような環境が提供され難くなっている。また圃場整備は農機具使用に合わせ畑や牧草地を仕切る帶状の植え込みや水路に沿ったヤナギのパッチなどが切り払われてきた。石狩湾岸のカシワの防風砂防林では現在でも少数のアカモズが確認されている。かつて北陸地方の海岸林にも多数が生息していた記録があるが、近年の情報は不足している。

参考文献

- Haas, C. A. and I. Ogawa, 1995. Population trends of Bull-headed and Brown Shrikes in Hokkaido, Japan. Proceedings Western Foundation Vertebrate Zoology, 6: 72-75.
羽田健三・高橋庸子, 1968. アカモズの生活史に関する研究:I. 繁殖期. 日本生態学会誌, 18(2):47-56
Imanishi, S., 2002. The drastic decline of breeding population on Brown Shrike *Lanius cristatus superciliosus* at Nobeyama plateau in central Japan. J. Yamashina Inst. Ornithol., 34: 228-231.
今西貞夫・茂田良光・吉野俊幸, 2006. 雄アカモズと雌チゴモズの種間つかいとその雑種. 山階鳥類学雑誌, 38: 90-96.
石城謙吉, 1966. モズとアカモズのなわばり関係について. 日本生態学会誌, 16: 87-93.
小川巖, 1977. 北海道におけるモズ類(Laniidae)の分布について. 1. 水平分布の概要. 山階鳥類研究所研究報告, 9: 44-55.
Takagi, M., 1996. A sexual difference in plumage of Brown Shrikes, subspecies *Lanius cristatus superciliosus*. J. Yamashina Inst. Ornithol., 28: 103-105.
Takagi, M., 1996. Sexual size dimorphism and sex determination of a Brown Shrike subspecies, *Lanius cristatus superciliosus*. Jap. J. Ornithol., 45: 187-190.
Takagi, M., 2002. Reproductive performance and nestling growth of the Brown Shrike subspecies *Lanius cristatus superciliosus* in Hokkaido. J. Yamashina Inst. Ornithol., 34: 30-38.
Takagi, M., 2003. Philopatry and habitat selection in bull-headed and brown shrikes. Journal of Field Ornithology, 74: 45-52.

執筆者：高木昌興（大阪市立大学大学院）